武家政権づくりに貢献した誇り高き東国武者

千葉常胤公ものがたり

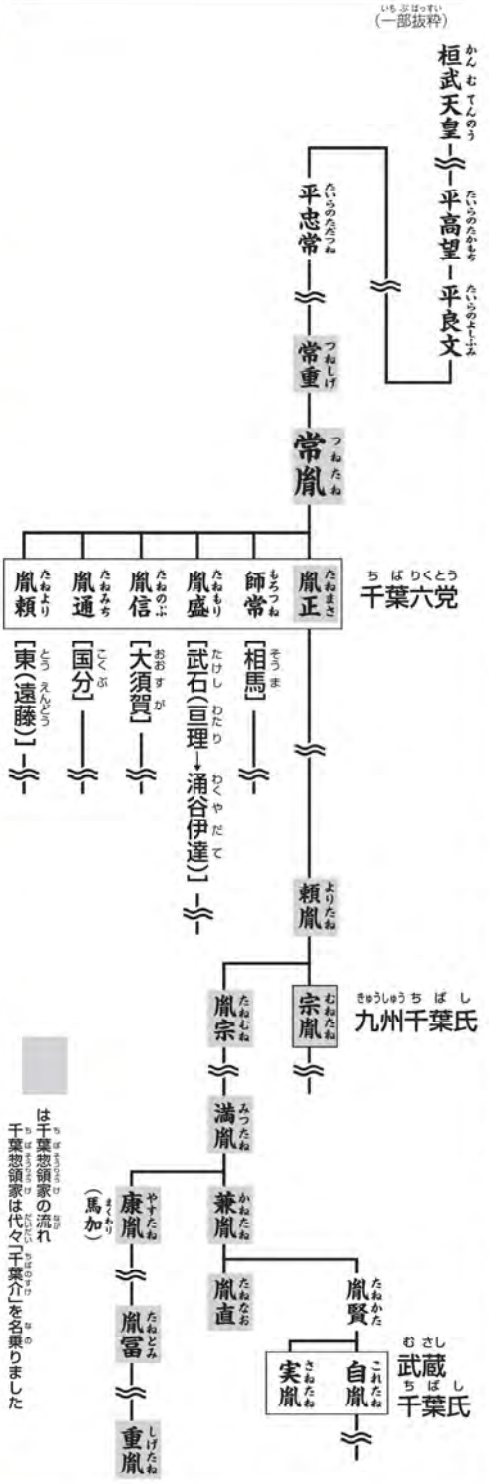
源頼朝をして「父」と呼ばしめた男

千葉市

千葉氏関係の系図・年表

千葉氏系図

（一部抜粋）



年表

1118年（元永元）千葉常胤生まれる。平清盛生まれる。
1126年（大治元）千葉常重、常胤、千葉に館を構える。
1167年（仁安2）平清盛が太政大臣となる。
1180年（治承4）源頼朝挙兵するも、石橋山の戦いで敗れ、房総半島へ逃れる。常胤、頼朝に応じる。鎌倉入府。富士川の戦い。常胤、源頼朝の上洛を止める。
1183年（寿永2）上総広常、頼朝に滅ぼされる。
1184年（元暦元）常胤、平氏追討のため源範頼に従い、西国に出発する。
1185年（元暦2）壇ノ浦の戦い、平氏滅亡。
1189年（文治5）常胤、東海道大将軍として、奥州合戦に参加する（奥州藤原氏滅亡）。
1190年（建久元）常胤、頼朝の上洛の後陣を任される。
1199年（正治元）源頼朝死去。
1201年（建仁元）常胤、84歳で死去。
1221年（承久3）承久の乱（後鳥羽上皇の討幕失敗）。
1274年（文永11）文永の役。頼胤が九州の地で戦死。宗胤が肥前に留まり、九州千葉氏の祖となる。
1331年（元弘元）後醍醐天皇の討幕計画失敗。護良親王、楠木正成などが挙兵。
1333年（元弘3）鎌倉幕府滅ぶ。
1334年（建武元）建武の新政始まる。
1338年（延元3・暦応元）足利尊氏が征夷大将軍となる。
1455年（康正元）馬加康胤らが千葉城を攻め、胤直は自害。胤直の甥、実胤、自胤は武蔵に逃れ武蔵千葉氏の祖となる。
1467年（応仁元）応仁の乱、戦国時代に突入するきっかけとなる。
1484年（文明16）このころ、馬加千葉氏が本佐倉城を本拠とする。
1538年（天文7）第一次国府台合戦
1563年（永禄6）第二次国府台合戦
1566年（永禄9）胤富、下総に攻め込んだ上杉謙信を退ける。
1573年（元亀4）足利義昭追放、室町幕府滅ぶ。
1585年（天正13）豊臣秀吉が関白に就任する。
1590年（天正18）豊臣秀吉の小田原攻めにより千葉惣領家は滅ぶ。

※この冊子内の年齢表記は全て数え年です。

主な登場人物

源 頼朝（1147－1199）

義朝の子。平治の乱で平氏に敗れて伊豆に流されました。1180年平氏打倒のため挙兵し、千葉氏などの助けをかりて武家政権（鎌倉幕府）を立てました。

千葉常胤（1118－1201）

常重の子。頼朝に味方して源平合戦などを戦い、鎌倉幕府の成立に大きく貢献しました。このため千葉氏は大きく発展しました。

源 範頼

頼朝の弟。頼朝に従って、源義仲・平氏を追討し、平氏滅亡後は九州を平定しました。

源 義朝

頼朝の父。保元の乱で活躍しましたが、平治の乱で平清盛に敗れ、東国へ逃げる途中で討ち取られました。

千葉胤頼

常胤の六男。京で警護の仕事をしていたので、京の情勢を常胤や頼朝に伝えていました。

千葉胤正

常胤の長男。源平合戦、奥州合戦に常胤を助けて参加しました。常胤の跡を継いで千葉氏の惣領になりました。

平 清盛

平氏武士団を率いて、保元、平治の乱に勝ち、朝廷内での地位を固め、全国に力を及ぼしましたが、源平の争いが本格化する前に死去しました。

上総広常

房総平氏惣領家のかしらであり、東国最大級の勢力を誇っていました。広常が加わったことで頼朝挙兵が成功したとも言われています。

千葉常重

常胤の父。緑区大椎に本拠を構えていたときに大椎を名乗っていましたが、中央区亥鼻付近へ本拠を移し千葉を名乗ったと言われています。

平 高望

桓武天皇のひ孫。889年頃平の名をもらい、上総介として京から関東にやって来ました。子孫は南関東一帯に広がり、千葉氏もその一つです。

和田義盛

頼朝の挙兵に参加しました。源平合戦、奥州合戦に従軍して活躍しました。

安西景益

頼朝が房総へ逃れてきた後、頼朝を助け、源平合戦を戦いました。

安達盛長

頼朝が伊豆にいた時からの家来です。石橋山の戦いの後、共に房総へ逃れ、常胤を味方へつけた人物とされています。

※1 桓武天皇：737-806。平安京に都を移した天皇です。
※2 上総介：上総の国（千葉県中部）の実質的な長官でした。

※領地：武士などが所有し支配する土地のことです。

※主従関係：「主人」と「従者（＝家来）」の関係です。
主人が家来の土地支配を認め（ご恩）、家来は主人に尽くします（奉公）。

※１保元の乱：天皇家、藤原氏の権力争いに、源氏と平氏の武力が加わった戦争です。源義朝と常胤が味方した側の勝利に終わりました。

※２平治の乱：保元の乱の後で対立が深まった、源氏と平氏の争いです。常胤は参戦しませんでした。

この戦で敗れた
源氏側に味方した千葉氏は
領地の一部を失うなど
房総での勢力を弱めていきました

殿！このままでは
我ら一族の未来は
ありませぬ

わかっておる
……

一方、
平清盛が率いる平氏は
絶大な勢力を
誇るのでした

平　清盛

※１流罪：刑罰の一つで、罪人を遠く離れた地や島に送る『追放刑』です。
※２後白河天皇：1127-1192。源平の争乱期に、朝廷の権力を保ちました。

※３以仁王：1151-1180。後白河天皇の皇子（天皇の息子）。平氏を討ち取る計画をたて、全国の源氏に兵を挙げて戦うように命令を出し、自らも挙兵しましたが、その戦いで亡くなりました。
※４手紙：令旨といって、皇族が出す命令書でした。

※１このとき、三浦義澄も一緒に頼朝を訪れています。
※２嫡流：一族の直系の血筋のこと。主に惣領（跡取り）と正妻の間に生まれた長男によって継がれる血筋を意味します。

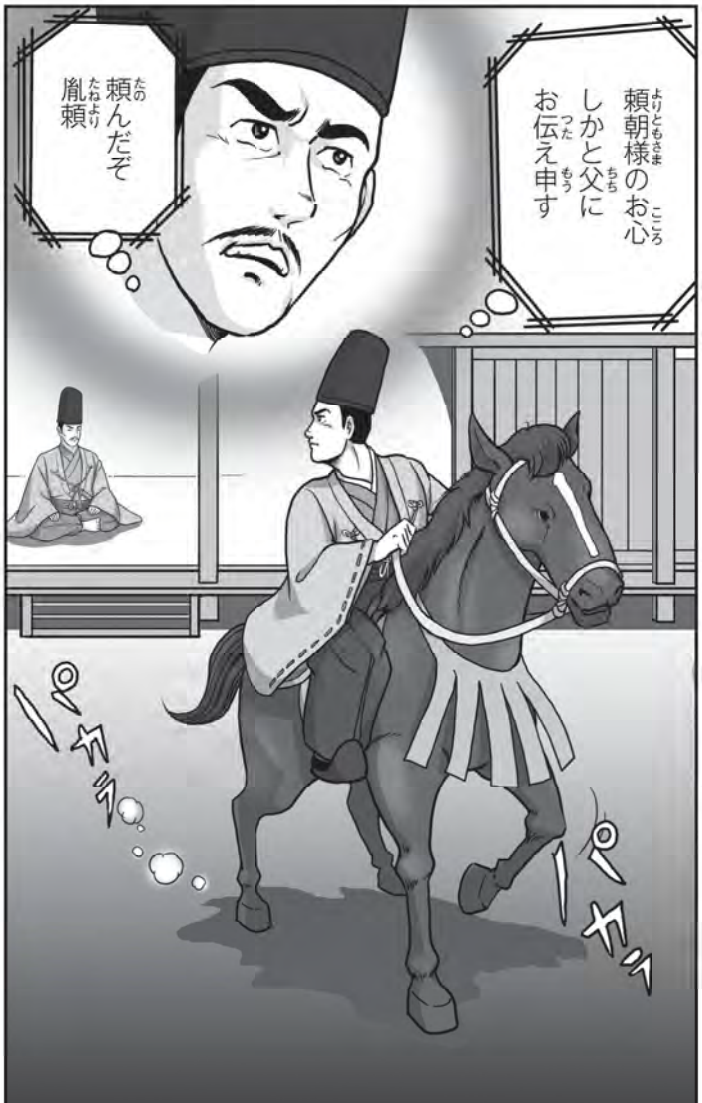
やはりそうであったか
わざわざ知らせて
くれて礼を申す
はっ

では
私はこれから
父のもとに
戻りまする
そうか…

戻られたら
千葉常胤殿に
伝えてくれ
はっ

頼朝は
負けぬとな…

この方は
あきらめて
おらぬ


頼朝様のお心
しかと父に
お伝え申す
頼んだぞ
胤頼
パカラ
パカラ

第2章　頼朝の挙兵

※合戦：8月17日に頼朝は挙兵し、伊豆目代（代官）山木兼隆を討ちました。その後、相模国の石橋山で平氏方（大庭景親）と対しました。

ハァ
ハァ
あまりにも敵の数が多すぎます！
ザァァァ
あっ！
ウッ
殿！早くお逃げください！
うむ ひとまず退却じゃ

殿、一時身をひそめましょう！
またも敵兵です
雨のために援軍が来なかった不運も重なり
10倍もの兵力を前に頼朝は退却せざるを得ませんでした

相模国・真鶴
（今の神奈川県西部）
この先の海岸に舟を用意いたしました

ここから房総へ向かいましょうぞ
うむ

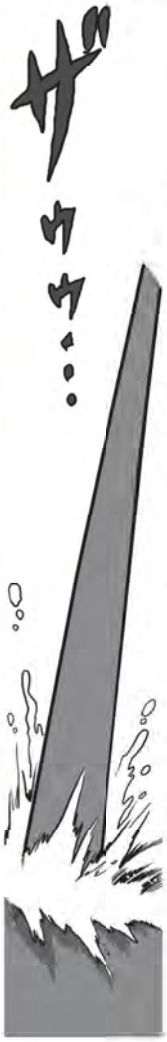
殿どうにか逃げ切りましたな
皆のおかげじゃ

多くの兵を失ってしまった…だが、ここであきらめるわけにはいかぬ！

房総で再起を図ろうぞ！
はっ

千葉常胤、上総広常が力を貸してくれれば…
上総　広常
千葉　常胤（当時63歳）

さあ皆の者行くぞ！


ザウウ…

頼朝は再起を期して海を渡ったのでした

第3章　頼朝と常胤

※頼朝が辿り着いたのは、房総半島南部（現在の千葉県鋸南町もしくは館山市）だと言われています。

千葉常胤殿の館に
ようやく着いたぞ
源頼朝の家臣
安達盛長と申す
千葉常胤殿に
お会いしたい
しばし
お待ちくだされ
殿が
お待ちでござる
こちらへ
主人の使いで
参上いたしました
ご使者
ご苦労でござった
千葉常胤と申す
こちらは我が息子
胤正、胤頼にござる
胤正
胤頼

千葉常胤殿
我が主人からの
頼みでござる
むっ

父・義朝を
助けた時のように
そなたの力を貸して
ほしい、と

……

父上
いかがなされた
ご返答を！
むっ

いち早く
お声を掛けていただき
我ら千葉一族
誇りに思います

頼朝様のお気持ち
しかと
受け止め申した

この時、常胤は
頼朝が自分を真っ先に頼ってくれたこと
そして平氏の力に押されて
辛い思いをしてきた千葉氏が
源氏の再興によって勢いを取り戻す
機会が訪れたことに感動し
しばらく言葉が出ませんでした
そのお言葉
主人も喜ぶことでしょう
お礼を申します

※ひと働き：頼朝と面会する前に、平氏側の勢力であった下総の目代（代官）を常胤が討ち取ったことを指します。

老齢ながら常胤は
献身的に頼朝に仕え
心の支えとなりました
そなたを
父のように
思う！
ありがたき
幸せ！
ふたりは日々
その絆を強く
していくのでした

頼朝は上総広常のもとへも使いとして和田義盛を向かわせました
パカッ
パカッ
パカッ
和田　義盛
ご助力をお願い申す！
うーん味方をしたい気持ちはあるがすぐには…
上総広常はとても慎重ですぐに頼朝に味方するべきか決めかねていました
なかなか動かない広常にしびれを切らした頼朝は…
広常を待っていられぬいざ出陣じゃ！

※畏敬の念：偉大な人を、おそれうやまう気持ち。

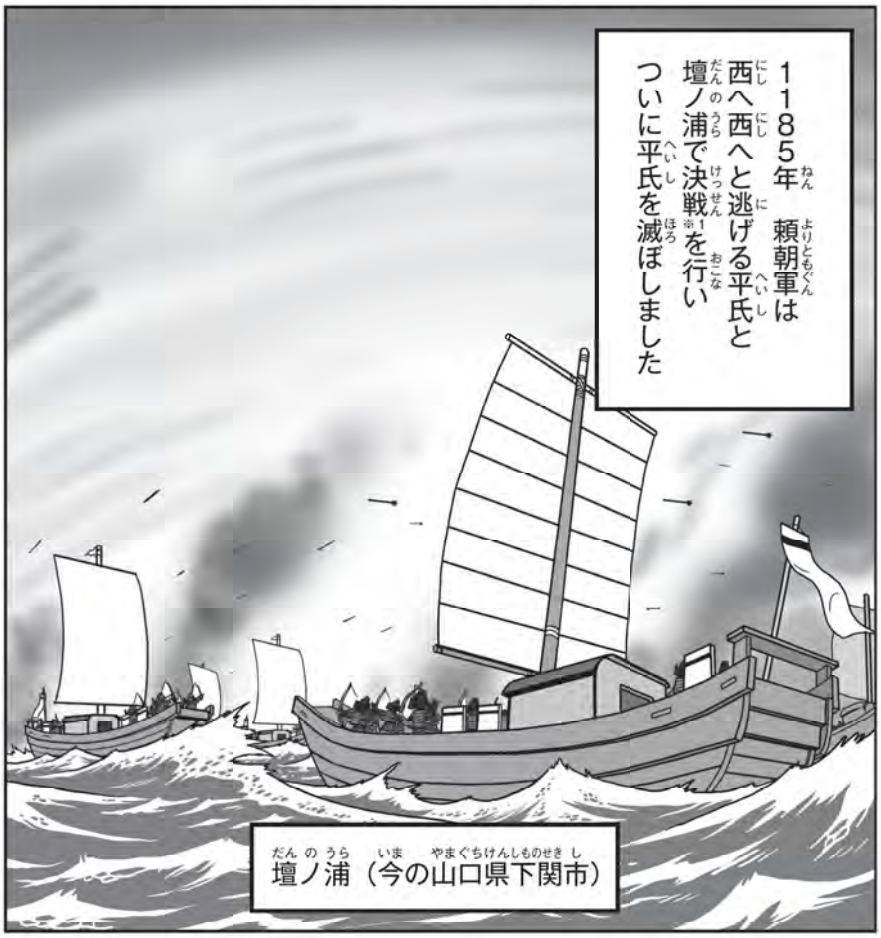
※富士川の戦い：1180年10月。富士川（静岡県東部を流れる川）を挟んで源平両軍が向かい合っていましたが、夜中の水鳥の羽音や、舟のかがり火に驚いた平氏が戦わずに逃げたことが知られています。

関東には
まだまだ平氏方につく
敵対勢力がいました
うむ
常胤の申す
通りじゃ
まずは足元を
しっかり固めよう
常胤の言葉を受け
頼朝軍はまず
関東の敵対勢力を
従わせました

※七夜の儀：子どもの誕生をお祝いする儀式のうち、生まれてから七日目の夜に行う儀式のこと。
親族や縁者が、食物や衣服、道具や家具などを贈ります。

※一ノ谷の戦い：1184年2月。今の兵庫県神戸市で行われた源平の戦い。源義経、範頼が率いた源氏方が勝利しました。

※１壇ノ浦の戦い：１１８５年３月。源平最後の戦い。この戦いで平氏は滅びました。
※２奥州藤原氏。平安時代末期の約１００年間、今の岩手県平泉町を本拠として東北地方を支配した一族。



※３東海道大将軍：頼朝は軍勢を大手軍・東海道軍・北陸道軍の三軍に分けて奥州藤原氏を攻めました。
このとき常胤は東海道軍の大将を務めました。

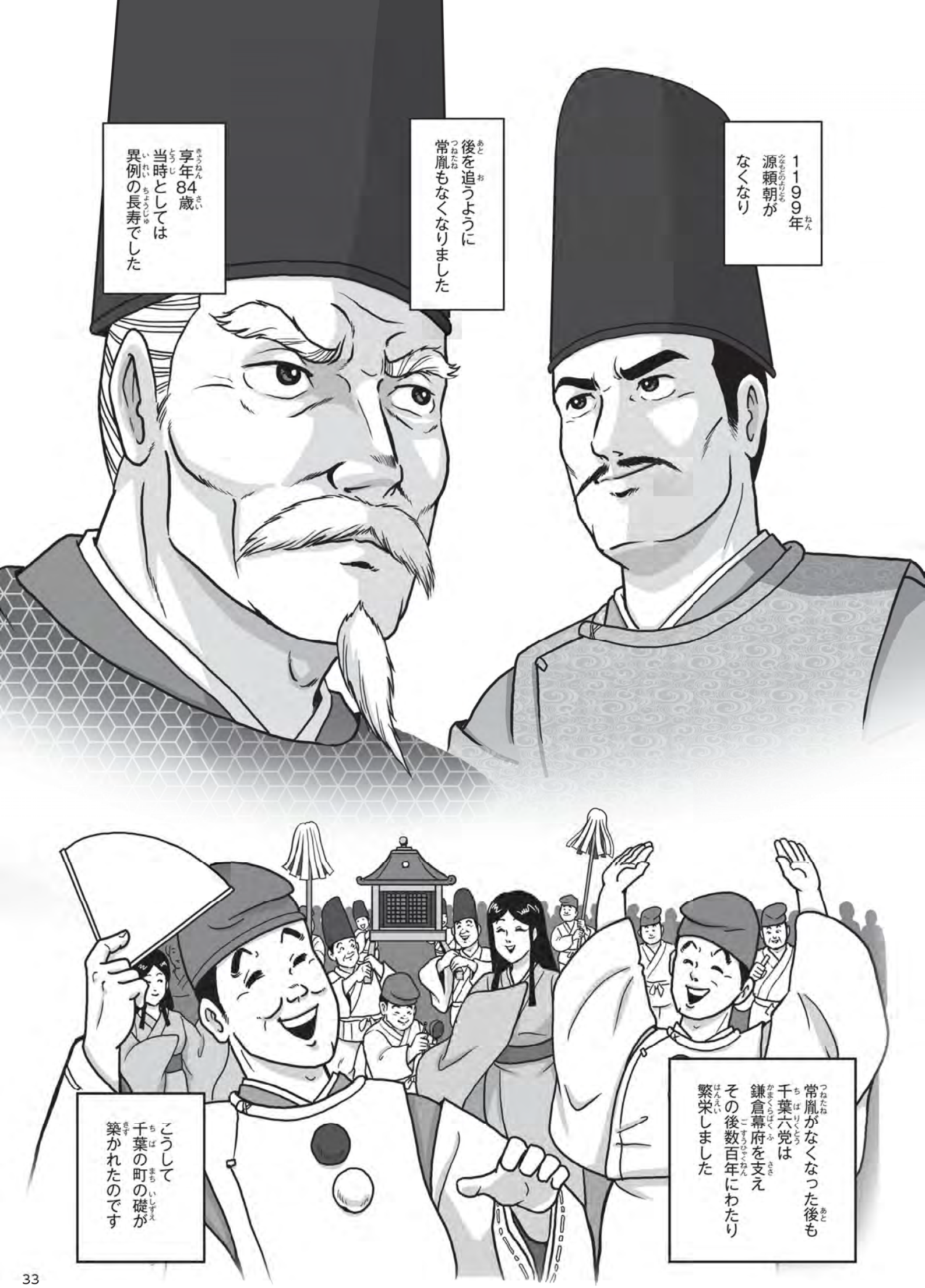
※武家政権：武家のかしらをたばね、支配するしくみのこと。

※1 上洛：地方から京の都に向かうこと。
※2 後陣：軍隊で、本隊の後ろに配置した隊のこと。後方からの攻撃に備えるので、その役はとても難しく、頼朝の信頼が厚かったことがうかがえます。

こうして常胤は
下総の本領以外にも
戦での貢献により
全国に領地を獲得します

あの苦しかった時代から
およそ30年が経っていました
常胤の活躍で
千葉氏は驚くほどの飛躍を
遂げたのです

その領地は
6人の子どもたち
(千葉六党)に
分け与えられました
千葉六党系図
千葉常胤
千葉胤正
相馬師常
武石胤盛
大須賀胤信
国分胤通
東胤頼


1199年
源頼朝が
なくなり
後を追うように
常胤もなくなりました
享年84歳
当時としては
異例の長寿でした
常胤がなくなった後も
千葉六党は
鎌倉幕府を支え
その後数百年にわたり
繁栄しました
こうして
千葉の町の礎が
築かれたのです

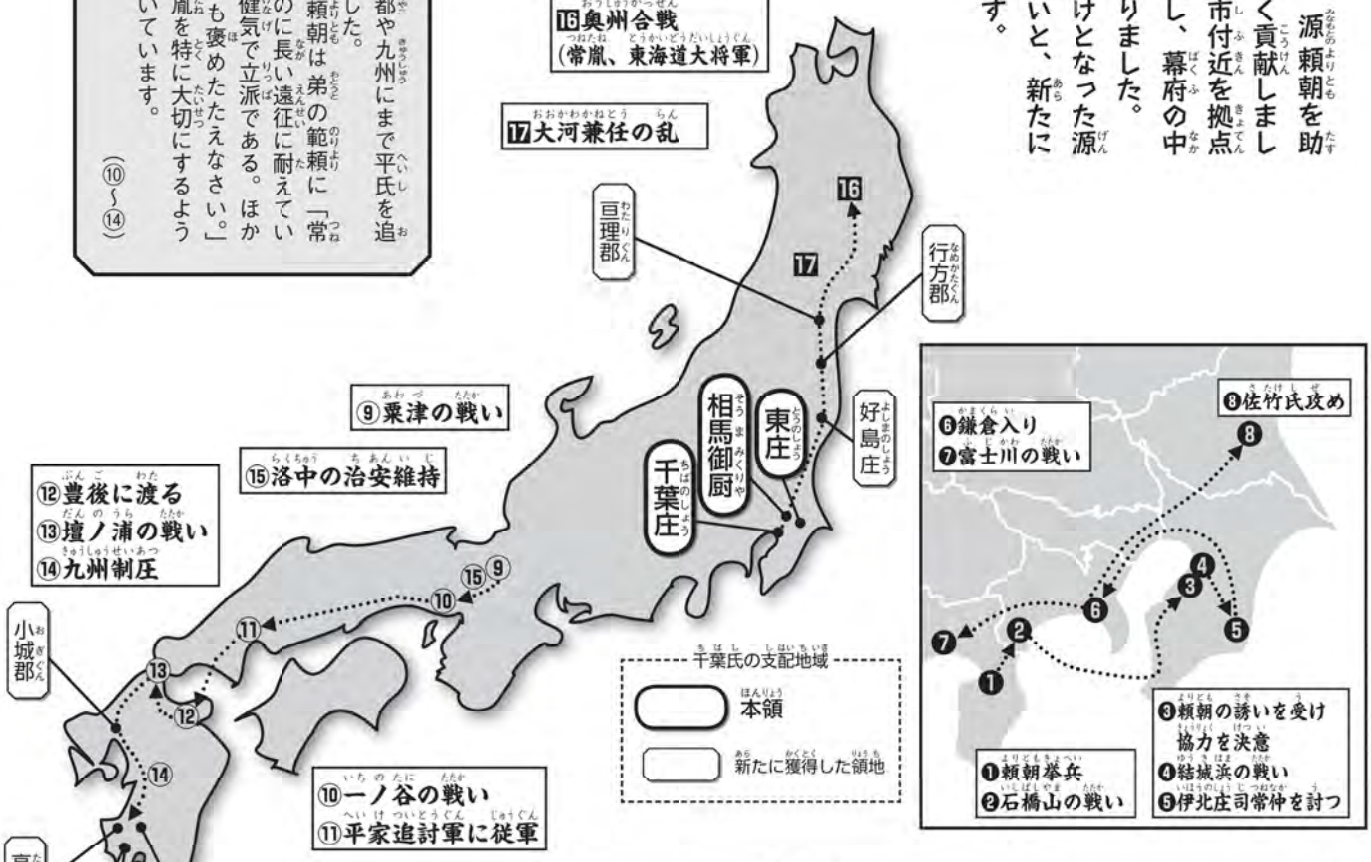
常胤の全国にわたる活躍経路

千葉氏は常胤の時代、源頼朝を助け鎌倉幕府の成立に大きく貢献しました。そして、現在の千葉市付近を拠点に全国各地に勢力を拡大し、幕府の中でも特に重要な一族となりました。

千葉氏の飛躍のきっかけとなった源平合戦をはじめとした戦いと、新たに獲得した領地を紹介します。

常胤は、奥州藤原氏を攻めるため、東海道大将軍として、奥州合戦に参加しました。（⑯）

常胤は京の都や九州にまで平氏を追って戦いました。そのとき、頼朝は弟の範頼に「常胤は高齢なのに長い遠征に耐えているのは特に健気で立派である。ほかの家来よりも褒めたたえなさい。」などと、常胤を特に大切にするような手紙を書いています。（⑩～⑭）



頼朝が平氏を倒すために兵を挙げましたが、石橋山の戦いで敗れ、房総半島に逃れてきました。頼朝が頼ったのが、上総氏と千葉氏でした。千葉氏の惣領（一族を代表してまとめ上げる人）、千葉常胤は頼朝の呼びかけにすぐに応え、一族を引き連れて頼朝と共に戦いました。その結果、頼朝に深く信頼され「父のように思う」と言われました。（❶～❸）

富士川の戦いで平氏に勝ったあと、そのまま頼朝は平氏軍を追って京の都に上ろうとしましたが、常胤などが「頼朝様は鎌倉にいて、まず関東をしっかりおさえましょう。」と進言しました。その結果、関東全域の武士が頼朝の味方をするようになりました。また、のちの鎌倉幕府の基礎が整備されていきました。（❼❽）

わしは63歳のときに源頼朝様の挙兵を助け、息子や孫たちと一緒に平氏と戦ったのじゃ。源平合戦などでの活躍で全国各地に領地をもらったのじゃよ。

常胤の生き様と人物像

我ら鎌倉武士と一族のことを語ろうぞ。今のみんなの考え方と違うことも多いと思うが、その基礎になったものもあるのじゃよ。

「一所懸命」

我ら武士団にとって、自ら開発して領地とした土地（本領）はかけがえのない大切なものじゃ。しかし、平氏の勢力が強まったころ、一部（相馬御厨）を失ってしもうた。この領地を取り戻すためには、何としてでも平氏を倒し、頼朝様のもとで領地を認めてもらう必要があったのじゃ。自らの領地（一所）を精一杯の力を尽くして（懸命に）守り抜くという考え方が、みんなが現在使っている「一生懸命」という言葉のもとになったのじゃ。

「ご恩」と「奉公」

頼朝様に領地の支配を認めていただいた「ご恩」に応えるために、我らはそのお返しをする、それが「奉公」じゃ。わしも頼朝様の命令に従って全国で戦い、その活躍が認められて、本領以外にも全国各地に新たな領地をいただくことになった。これも「奉公」に対しての「ご恩」ということになるのじゃよ。元寇のとき、わしの子孫が九州で戦ったのも幕府への「奉公」じゃ。一族が鎌倉時代・室町時代と約400年にもわたって繁栄できたのも、自分の主に精一杯の「奉公」を尽くした「ご恩」じゃと思うておる。

「名こそ惜しけれ」

あるとき頼朝様は、京都の貴族出身の家来たちを「常胤を見よ！お前たちとは比較にならないほど領地を持っておるが、慎ましく質実剛健な暮らしをしている。」と叱ったそうじゃ。武士にとって大切なのは「弓馬の道」じゃ。「いざ鎌倉」というときに備え、日頃から武芸の技を磨き、うろたえることのない心を鍛えることが大切なのじゃ。服装の豪華さを褒められるなど恥ずかしさの極みじゃ。わしは、武士としての誇りにかけ、千葉の名に恥じぬような行動を心がけておったのじゃよ。

「妙見信仰」

全国の千葉一族ゆかりの地を訪ねると、必ずと言っていいほど「妙見」様をまつった社に出会うはずじゃ。妙見様は北極星・北斗七星を神様としてまつったものでな、我ら一族は妙見様の信仰を通じて深く結びついていたのじゃよ。我ら一族の紋章もそのことに由来することを知っておったか？そして、全国の一族を束ねていたのが千葉に本拠を置く千葉惣領家であり、一族を精神的に束ねていたのが妙見様への信仰なのじゃ。

常胤なき後の千葉氏400年の歩み

(1) 鎌倉幕府の下で下総の守護を務め抜く

源頼朝の死後、北条氏の力が強まり有力な御家人が滅ぼされる中、千葉氏は下総守護を一貫して務めるとともに、全国に散在する領地の支配も続け、幕府内で高い地位を保ち続けました。鎌倉時代を通じて守護を務め抜いたのは千葉氏と下野守護小山氏のみでした。【鎌倉時代】

(2) 元寇でも大活躍した千葉氏

元寇の際には、幕府の命令により、九州に領地を持つ千葉氏も遠征し、元との戦いに奮戦しましたが、千葉頼胤は戦いの傷がもとで九州で死去。その子の宗胤は元の再来に備え九州に留まることになりました。【鎌倉時代中期】

(3) 千葉氏の分裂と九州千葉氏のおこり

宗胤が九州に長く留まる中、本拠の千葉では弟の胤宗の力が強まり、これ以後、千葉氏は千葉と九州とに分かれ対立することになります。そして、室町時代初めの混乱期を経て、それぞれが独自の歩みをすることになりました。【鎌倉時代中期から室町時代初期】

(4) 室町幕府の下での千葉氏と本拠の移動

室町時代も一貫して下総守護を務め大きな力を保ちましたが、関東地方の権力争いに巻き込まれ、千葉胤直は一族の馬加康胤らに滅ぼされました。馬加千葉氏は、本拠を本佐倉城（酒々井町・佐倉市）に移し新たな千葉惣領家となります。滅ぼされた胤直の甥である実胤・自胤は武蔵に逃れ武蔵千葉氏となり、馬加千葉氏と対立関係になります。【室町時代初期から中期】

(5) 戦国期も下総を死守した千葉氏

戦国期に入ると、房総半島南部で戦国大名の里見氏などが勢力を強め、下総に勢力を伸ばし始めました。彼らに対抗する必要から千葉氏は小田原を本拠とする有力な戦国大名の北条氏と同盟関係を強め、下総の支配を保とうとしました。しかし次第に北条氏の支配下に組み込まれていくことになりました。【室町時代後期】

(6) 豊臣秀吉全国統一　ついに千葉氏も滅亡

全国統一を進める豊臣秀吉と対立関係となった小田原北条氏は、1590年にその攻撃を受け戦いに敗れます。北条氏に従っていた千葉氏も運命を共にすることになりました。千葉氏の領地は没収され、約400年にわたる下総の支配者としての歴史は、幕を閉じることになりました。最後の惣領家当主は重胤でした。【安土桃山時代】

わしが死んでからの千葉氏は、当時世界的に力をつけていた元の襲撃（元寇）や、幕府内での争いをきっかけに分裂をしていったのじゃ。それぞれの土地で力を持ったのじゃよ。

千葉氏ゆかりの主な都市

常胤は息子たちとともに源平合戦や奥州合戦に参加し、その功績によって、北は東北から南は九州まで、全国に領地を獲得しました。千葉六党と呼ばれる常胤の6人の息子たちは、領地を分割して引き継ぎ、それぞれが本拠として領地の地名を名乗りました。

千葉氏はその後も、分家を繰り返すなどして、全国各地に広がっていったのです。

■宮城県亘理町・涌谷町
[武石氏(亘理氏→涌谷伊達氏)]
この地を舞台にした山本周五郎の小説「樅ノ木は残った」に登場する伊達安芸宗重は、千葉氏の系譜を受け継ぐ人物。

(涌谷城跡)

■佐賀県小城市
[九州千葉氏]
九州の小京都と言われ、「祇園祭」や「ようかん」が有名。

(祇園祭)

※地名は現在のもの

■福島県相馬市・南相馬市
[相馬氏]
国指定重要無形民俗文化財「相馬野馬追」が有名。

(相馬野馬追)

■岐阜県郡上市
[東氏(遠藤氏)]
日本三大盆踊りの一つ「郡上踊り」が有名。

(郡上踊り)

■東京都板橋区・足立区・台東区など
[武蔵千葉氏]

(赤塚城跡)

日本全国に広がった千葉氏の領地には、今も歴史が感じられる場所があるのじゃ。機会があったらぜひ行ってみておくれ。

氏ゆかりの場所

千葉市の市章と千葉氏

千葉市の市章は千葉氏の月星の紋章からとったものです。
千葉氏の紋章は月星・九曜星の両方が使われていますが、この月星に千葉の「千」を入れて、大正10(1921)年に、市になったことを記念して市章としました。

月星紋

九曜紋

千葉市の市章

①猪鼻城（千葉城）跡

中央区亥鼻1-6-1

常重が本拠地を大椎から亥鼻付近に移して以来、千葉惣領家の胤直が滅ぼされるまで、この付近に千葉氏の城があったと伝えられています。当時の城は今のような天守閣の建物ではなく、櫓や平屋の建物であったと考えられています。

②お茶の水

中央区亥鼻1-6-1

数々の言い伝えを残す泉です。千葉一族は代々この水を、赤ん坊を入浴させる水に使用したといい、常胤は源頼朝が戦いに敗れて房総に渡り千葉に来た際に、お茶をささげたという伝説が残っています。現在は、水は湧き出ておらず、記念碑が由来を伝えています。

④千葉寺

中央区千葉寺町161

市内最古の寺院です。火災で失われたものを、常胤が再建し、千葉氏の信仰を受けたとされています。ここの境内にある瀧蔵権現は代々の千葉氏の祈願所の一つであり、当主の元服の時に武運長久を祈願していました。境内のいちょうの木は県指定の天然記念物になっています。

③七天王塚

中央区亥鼻1丁目他

千葉氏の妙見信仰に関係して、7つの塚が北斗七星の形に配置されていると言われていますがはっきりとはしていません。塚の上には災いや、はやりの病をしずめる「牛頭天王」がまつられています。

千葉市に残る千葉

⑧大日寺

稲毛区轟町2-1-27

第2次世界大戦前まで千葉神社の隣にあった大日寺は、戦後稲毛区轟町に移転しました。境内には、千葉家累代の墓碑と言われる石塔が並んでいます。

⑦白幡神社

中央区新宿1-19-4

昔は結城稲荷と言われていましたが、源頼朝がこの地を通過するときに、神社の境内に源氏のシンボルである白旗を立てて戦の勝利を祈願したと言われています。このことから、白幡大明神と名が改められたと言われています。

⑥千葉神社

中央区院内1-16-1

千葉氏の先祖、平忠常が建てたと言われています。千葉の妙見信仰の中心的な役割がありました。千葉神社にある月星紋などは千葉氏の紋章の一つです。源頼朝が鎌倉へ向かう途中、千葉一族と一緒にお参りしたと言われています。

⑤君待橋

中央区港町4-16

寒川大橋近くの小川に「君待橋」という橋がかかっていました。常胤が源頼朝をここで出迎えたという説があります。

「常胤の大功においては、
生涯さらに報謝を尽くすべからざる」

源頼朝

常胤の大きな功績には、生涯をかけても報い切れない。

平成30年５月発行

マンガ：小山規（漫画化伝説）

印刷・製本：第一資料印刷株式会社

千葉市・千葉市教育委員会
問合せ：千葉市総合政策局総合政策部
都市アイデンティティ推進課
〒260-8722 千葉市中央区千葉港１番１号
TEL：043-245-5660　FAX：043-245-5476

この冊子は、諸説ある中でさまざまな資料を参照し、総合的に判断して作成しました。
本書の一部または全部について、無断転載を禁じます。